ふるさと安曇野
きのう きょう あした

No.14　2016.7.16

人の一生Ⅰ　安曇野で生まれ　大人になる

初節供　嫁の里や隣組、近所からもらったお祝いの飾りが並ぶ（穂高北穂高　昭和30年）

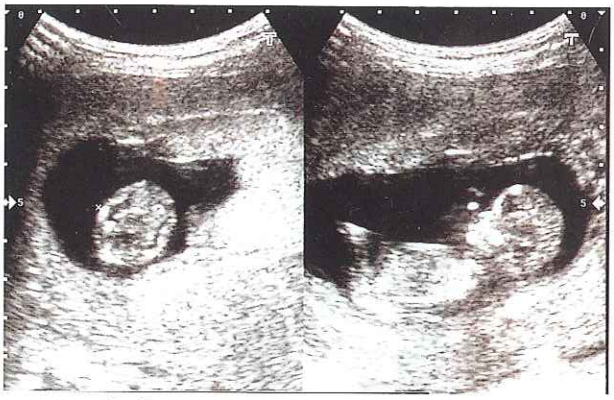
かつて日本では、「片足を棺桶」などといって、出産は母子ともに命の危険を伴うもので、母親は命がけで子供を出産しました。同様に乳幼児の死亡率も高く、「七つまでは神の子」として、数えで七歳になるまでは、子供の魂はいつあちら側（あの世）に連れて行かれてもおかしくないと考えられていました。そのため、幼い子供の親たちは、どうにかして子供の魂がこの世に定着するようにという祈りや願いを込めて、さまざまな儀礼をおこないました。安産祈願や出産後の産飯、宮参りや食い初めなど、すべて子供の無事を祈り健やかな成長を祝う儀礼です。

民俗学では人の一生のうちにおこなう儀礼を通過儀礼・人生儀礼などと呼びます。日本人の多くはこの通過儀礼を喜びや悲しみとともに祝ったり祈ったりしたのです。医療の進歩を享受し、乳幼児の死亡率が減り、平均寿命の長さが世界でも指折りの国となった現在であっても、私たちはさまざまな通過儀礼をおこなっています。中には高度経済成長期以降の社会の変化から、ほとんどおこなわれなくなったり、形がい化した儀礼も少なくありません。

安曇野でどんな儀礼がおこなわれていたのか、それはどのように受け継がれ、どのように変わっていったのでしょう。そして、安曇野で大人＝一人前になるとはどんなことなのでしょうか。今回は誕生から成人するまでを見ていきましょう。

◆◆人が人として生まれるには◆◆

命の不思議　人がこの世に生まれてくるためには、女性の持つ卵子と男性の持つ精子が受精して、女性が妊娠することが必要です。普通、卵子は生まれた時点では200万個あり、精子は一回の射精で１～３億個といわれています。そのうち、たった１つの卵子と精子が受精して、あなたという人が生まれてくるのです。厚生労働省の人口動態調査の統計によれば、平成26年の日本人女性一人が生涯に産む子供の人数（合計特殊出生率）は、1.42人ということですから、その天文学的な確率がわかります。



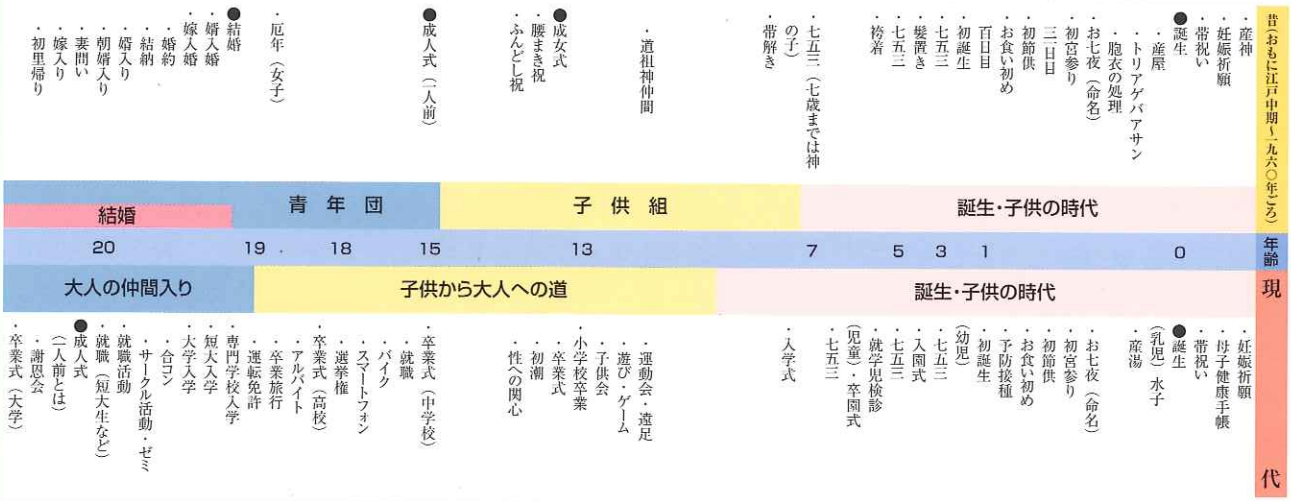
胎児のエコー画像　今は出生前に
性別を知ることもできる（平成 27 年）

乳幼児の死亡率　前述の人口動態調査では、明治32年（1899）から最近までの乳児死亡率も表されています。明治32年の新生児（生後28日まで）の死亡率は1000人のうち78人、つまり7.8％が生まれて28日以内に亡くなっています。同年の乳児（満１歳まで）の死亡率がおよそ15％です。明治32年は「産婆規則」が発布され、それまで集落で「とりあげ婆」などと呼ばれた資格はないものの経験を積んだ女性による出産から、産婆の資格が免許制度

コラム① 人生儀礼の昔と今

人が生まれて一人前に育つまでには、さまざまな儀礼がおこなわれています。幼児の死亡率が高かった時代、子育てには神仏の力を借りる信仰的な意味をもった行為と同時に、家族を始め親族・地域社会の人々など多くの人の力を借りながら、子供は育っていくものを考えられていました。また、儀礼をおこなうことによって、その子の成長を地域社会が共有し、ともに喜び見守るという地域社会の認知という意味合いももっていました。地域はみんなで子供を守り育て、子供はそうした地域社会の中でさまざまな儀礼をおこなってもらいつつ、その行動範囲を家庭内から地域社会へ、そしてさらに広い地域へと広げていてくことができました。

出産はごく個人的な出来事と考えられるようになった現在、前述のような意識は次第に薄れつつあり、人生の祝い事である儀礼は個人に帰属する事という考え方に変化し、次第に地域社会との関わりが薄れつつあります。そうした変化は育児にも影響を与え、育児に悩む母親が相談する人や場所もないといった問題にもつながっています。現在、人生儀礼はその意味が忘れられがちとなり、儀礼をおこなうことが目的となって、儀礼はイベント化が進んでいるようにみられます。



【図　人生儀礼の昔と今（『人生儀礼事典』小学館に加筆修正）】

化され、近代医療による出産へと歩み始めた時期でもあります。そのような時代であっても、満１歳になるまでにおよそ15％の子供の命が失われているのですから、それ以前の時代においてはなおさら、推して知るべしといえましょう。子供を無事に育て上げたいという親たちの思いも必死であったろうと想像できます。

◆◆出産にまつわる儀礼◆◆

妊娠祈願　かつては、女性にとって結婚は子供を産むことと同様の意味を持っていました。そのため、結婚後なかなか妊娠をしない場合には、嫁は婚家で気まずい思いをすることもあったといいます。昭和34年に豊科へ嫁いだ女性は、結婚一年後の集落の祭りで、家の人が近所の人たちに「うちの嫁はなかなか子供ができない」と話しているのを聞いて切なかったといいます。

結婚＝子供を産む、という観念が薄れた現在はほとんどおこなわれなくなっていますが、結婚後は子供を設けることが当たり前だった時代は、妊娠するための祈願も多くおこなわれていました。仏崎観音堂（大町市）へ参ったり、子供を産んだ人や家族の使ったものをもらってきてあやかるなどがおこなわれていました。

妊娠　妊娠した場合、嫁は先ず姑に報告することが多かったようです。先に実家へ伝え、実家から嫁ぎ先へ伝えるということもありました。その際は「子供ができたようなのでお願いします」などと伝えたといいます。

安産祈願　安産祈願は、氏神に願掛けをしたり、松本市蟻ケ崎の塩竈神社などへ底の抜けたひしゃくを奉納するなどさまざまなかたちでおこなわれていました。安曇野を含む松本平では一般的に妊娠から奇数月の戌の日を選んで、帯祝いがおこなわれます。安曇野では妊娠五か月目の戌の日におこなわれることが多く、妊婦の実家などから晒布や紅白の反物などが贈られました。晒布は腹帯やオムツに、反物は着物の裏地などに使ったといいます。

安曇野では同姓（親戚）などで年上の夫婦をハネオヤなどと呼んで、結婚後、親同然の付き合いをすることが多くありました。ハネオヤは、仲人（チューニン）よりも近しい関係で、特に嫁はさまざまな相談をしたり、夫婦仲がうまくいかないといった際にはハネオヤに間に入ってもらって仲裁してもらうなど、頼りにした存在でした。

帯祝いには、ハネオヤ（妻）や妊婦の母、近親の女性などを招き、ハネオヤが妊婦に腹帯を巻いてやる、或いは巻き方を教えたりなどしました。腹帯は岩田帯とも呼ばれ、赤字で「寿」と書いたといいます。人生儀礼そのものにもいえることですが、初子は丁寧にやり、次からは内輪でやることが多かったといいます。

『堀金村誌』には「お産の重い時には軽くする意味で田んぼの水を切ってこいといい、田んぼの畔を切に行った」とあり、大切な田んぼの畦を切ってでも、無事の出産を祈ったことが窺えます。

出産　現在のように病院で出産することが多

塩竈神社へ奉納された底抜けひしゃく
（松本市蟻ケ崎　平成28年）

くなったのは昭和40年代以降のことです。それ以前は自宅で出産することが当たり前でした。初子の出産の場合、妊婦は実家で出産することが多く、納戸や小座敷などが産室になりました。

北穂高のＨさんは、初子は病院で出産しましたが、昭和32年、次子を自宅で出産しました。普段自分の部屋として使っている部屋を産室として使い、畳の上に布団を敷いて、布団の上に油紙や新聞を敷いて出産したそうです。近所に産婆がいたので、お願いしていたといいます。次子は真夜中０時に生まれ、産湯は義母がしてくれたといいます。二度目の出産だったので２、３日後には起きて、もう自分でおむつなど洗濯していたそうです。

臍の緒と後産　臍の緒は、胎内で母親（この世）とつながっていた証でもあります。

自宅で出産していた時代も臍の緒は大切なものと考えられていました。保管しておき、子供が大きくなったら渡す、同様に無事に育ったら捨てるということもありました。今ではほとんど伝えられていませんが、子供が病気の時に煎じて飲ませたという事例もありました。何故なのかは伝わっていませんが、医療が発達していない時代に、あの世へ行きかけた子供の魂を、この世とつながっていた臍の緒の呪力で呼び戻そうとしたとも想像できます。

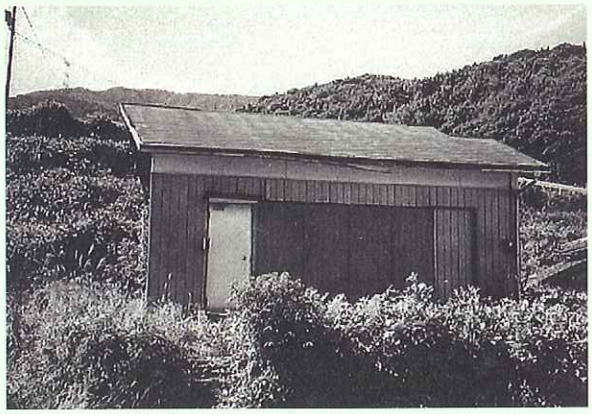
出産後に子宮から剥がれ落ちて出る胎盤のことを胞衣といい、これを娩出することを後産（のちざん・あとざん）といいます。胞衣をどうするかは家によって違いますが、墓に埋める、共同のエナステバに埋める、人が良く踏む戸間口に埋める、日の当たらないように縁の下に埋める、などの例があります。埋める場合は犬などの獣に掘り返されないように深く埋めました。豊科では犬に掘られると産婦が腹を病むなどともいわれていました。

現在、胞衣は医薬品などに利用されることがあります。その処理はほとんどが産院任せですが、産院から「自宅のお墓に埋めるように」と渡されたという平成３年生まれの人も

コラム② 産小屋さまざま

出産は女性の大厄ともいわれるほどの大事で、時には産婦も生児も命を落とすことがままありました。したがって、出産は産神がまつられる特別な空間で産神に守られながらおこなわれるものであると考えられていました。その施設を産小屋とか産室・産所などとよび、地域や家によってさまざまな様相を見せています。たとえば、福井県敦賀市などのように家族と隔離されたムラはずれにある産屋とよばれる独立した建物を利用したり、家の中でも土間の一隅や納戸などがあてられ、出産による血の穢れが他に及ばないような工夫がされていました。同時に、産婦はそこで21日間ぐらいの期間を家族に気兼ねすることなく、ゆっくり過ごすことができたのです。安曇野市では夫婦の寝室などを利用し、畳を上げて藁を敷き、その上に布団・灰・油紙・襤褸布などを敷いて出産しました。病院出産は家によって始まった時期はさまざまですが、第二次世界大戦後から次第に増加し始めました。いわゆる産婆は昭和40年代頃から次第に姿を消し、それに伴って出産の場で行われる例えばウブメシなどの儀礼も次第に姿を消していきました。

現在の出産はその多くが病院で行われるようになり、一部には豪華ホテル並みの施設をもつ病院も存在して、かつての出産の場とはかなりその様相を異にしています。出産そのものも、産婦自らが生み出す出産から、出産予定日も土日にあたれば陣痛促進剤などを使用し助産師に産ませてもらう出産へと変化しています。



福井県敦賀市沓の産小屋（平成 10 年頃）

います。

産湯　産湯を使わせる期間は、家や地域によります。一日一盥ずつ、七日間浴びせたという例やお宮参りまで毎日という例までさまざまです。産湯は不浄なものなので、日に当ててはいけないとされ、床下へ捨てたという例や、盥の湯を捨てた後、盥を三つ叩くと３年、五つ叩くと５年目に次の子が生まれると伝わっている地域もあります。

産湯は、現在は産院で沐浴指導として
行われることが多い（平成 27 年）

産飯　子供が生まれるとすぐに新しく飯や赤飯などを炊き、テショー（小皿）に小石を２個或いは３個のせて産神に供えました。小石は「子供が固く育つように」という願いとともに、産神の依代と考えられています。穂高ではこれに汁やお頭つきの魚を、明科では田作りを、豊科と堀金では三盛をつけていた事例があります。多くはハネオヤや産婦の実家、産婆、近親者などを招いて祝いました。

また、生まれて三日目の三日祝い（ミッカエ・ミッカエショ）に同様の祝いをした家もあります。

産着　生まれた子供に着せる着物を産着といいます。産婦の実家から贈られたり、産婦が縫うこともありました。昭和35年に初子を出産したＴさんは、結婚前に農閑期のみ松本市まで裁縫の学校へ通ったので、子供の着物はすべて自分で用意したといいます。生まれてすぐは襤褸などにくるんでおき、三日祝いやお七夜の時に初めて袖のある着物である産着を着せました。産着はうこんで染めたものや麻の葉模様のものがあり、木綿やモスリンなどが使われました。うこんも麻の葉も魔除けの意味があり、子供の無病息災が願われています。産着の背には背守りといって色糸でさまざまな刺繍をしたり、三角の布を袋に縫って上だけ縫い付けたりすることがありました。刺繍をするのは、産着は一つ身の着物で背中に縫い目がないので、「目」を縫い付けて魔除けとしたり、三角の袋は火（囲炉裏など）に転んだ時に産土神に引き上げてもらうためといわれます。

お七夜　生まれて七日目はオシチヤといい、子供の命名の祝いがされました。三日祝いもあるので簡単にすますことが多いようですが、コンボコ見などといって近所の人が、かんぴょう・凍豆腐・米の粉などの産見舞いを持って子供を見に来たりしました。初子の場合、産婦は実家にいる場合もあるので、婚家から産着を持って訪ねることもあったといいます。この日、子供は祝いに来た人々に抱いてもらったりして、子供にとって第一段階の忌の明ける日と考えられていました。同時に、子供にとっては名前をつけてもらい、初めて産着を着せてもらって、人として認められる日でもありました。

うこんの産着に縫い付けられた背守り
（穂高北穂高　昭和 29 年）

現在は、多くの産婦が産院を退院し、家族での子育てを始める日でもあります。

宮参り　男女ともに33日目とか、男児なら31日目、女児なら32日目などさまざまですが、およそ生後一月に産土神などに宮参りをします。

初子の場合、産婦は宮参りに合わせて実家から帰ることが多かったようです。昭和46年に出産した豊科のＹさんは、初子の宮参りにはハネオヤ（妻）や実家の親などに行ってもらいました。子供を抱いたのはハネオヤで、Ｙさんは姑とお膳の準備をしていたので宮参りには同行しませんでした。宮参りは近くの氏神様へ行きました。酒を入れた徳利と杯（さかずき）を数個お盆に載（の）せて持参し、途中で会った地区の人やお宮などで振舞ったそうです。このように丁寧にしたのは初子のみで、次子からは簡素（かんそ）にし、Ｙさん自身も同行したそうです。

宮参りは子供の健康を氏神に願うとともに、氏子として認めてもらうと同時に、集落の人たちに見せて回り、集落の構成員として認めてもらうという意味があります。そのため、安曇野各地でかつてよくおこなわれた宮参りでは、氏神に供えたお神酒（みき）を帰り道に集落の人に振る舞ったりしました。また、集落の人に男の子なら顔に墨を、女の子なら紅をつけてもらい、健やかな成長を願ったのです。

子供の母親が宮参りに同行しないのは、産の忌があるからなどといいますが、現在ではそういった観念が薄れ、子供の母親が抱いて宮参りする光景も見られます。

宮参りの日に　（穂高北穂高　昭和29年）

◆◆育児にまつわる儀礼◆◆

食い初め　生後100日経（た）つ頃におこなわれるのが食い初めです。家や地域によっては、110日、120日でおこなうところ、男女差のある場合もあります。家に囲炉裏があった時代は家族銘々（めいめい）に箱膳（はこぜん）（膳箱とも）があって、箱膳には

コラム③　雪隠参り

便所は人の生活になくてはならない施設です。家族の汚物を蓄え、それを肥料として使用することによって作物は豊作になります。しかし、一方便所は落ちたら命の危険にさらされるような場所でもあるため、人々は便所に神を祀り、便所を清潔にすることに務めました。便所をきれいに大切にしていると下の病にかからないとか、きれいな子が生まれるという伝承は、ほぼ全国的にみられる言い伝えです。そのため、女性は便所の掃除を念入りに行っていました。下伊那郡阿南町新野のように、年末には家族の一年の無事を感謝し、大便所に年取りの膳を供えて「便所の年取り」をしました。岡谷市のように新築の家に入るときにはまず便所で主人がうどんを食べて引越しをするという例もみられます。

生児が初めて外出する機会は生後20日目ごろですが、この折に行く場所が便所というところは栃木・群馬・長野・新潟地方などに点在します。便所を何と呼ぶかによって儀礼の呼び名も異なりますが、雪隠参り・便所参り・厠参りなどといって、近所の家3軒の外便所を回ってくるところが多く、各々の便所に供え物をしてお参りします。みられます。そこに蓄えられている汚物は、あらゆる植物を育て豊作をもたらす強い力をもつものと考えられていましたから、そこに参ることによって、生児にもその強い力を付与してもらおうと考えたのでしょう。便所がいわゆるくみ取り式でなくなった現在、雪隠参りの習俗もすっかり姿を消してしまいました。

大町市常盤一本木の便所神（参考）

日常使う食器が収められていました。そのため、食い初めに際し、家族の一員としての箱膳と食具を用意したり、産婦の実家やハネオヤなどから贈られたりもしました。食い初めのことを、膳ごしらえと呼ぶ地域もあり、同姓などを招いて祝うこともありました。ハネオヤや一家の長老が、子供にうどんや粥などの柔らかいものを食べさせたり、食べさせる真似をしました。歯が丈夫になるようにと子供の膳に石を置いた例もありました。食い初めにうどんなどのめん類を食べさせるのは県内でも安曇野の周辺地域だけです。

初節供　安曇野は月遅れで節供をおこなうところが多く、上巳の節供は四月、端午の節供は六月です。よくいわれたのは「片節供はいけない」ということです。そのため、男女児ともに四月と六月に祝いました。男の子でも雛飾りを、女の子でも五月人形をもらったのです。

現在のようにごく近親だけで祝ったのではなく近所の人などもお祝いしてくれました。昭和28年に松本市から北穂高に嫁いだＨさんは男児を出産しましたが、片節供はいけないと、隣組の人が雛人形を、近所の人はてんでにお祝いなど持ってきてくれ、お返しには、柏餅や桜餅などをあげたといいます。子供の誕生と成長を隣近所でも共に願っていたことがわかります。

初誕生　子供が生まれて初めて迎える誕生日を初誕生といいます。子供の年齢を満年齢で数える現在と違って、昔は年取り（大晦日～正月）に皆ひとつ年を取ったので、誕生日を祝うことはなかったのですが、初誕生だけは祝いました。この時に雛人形や武者人形を贈って祝うこともありました。

『穂高町誌』に見える初誕生の祝いでは、「ハネオヤや仲人、近親、同姓などをお客に呼び、力餅といって塩を入れた餅をつき、月の数である12個を丸めて父親の飯茶わんに入れ、風呂敷に包んで子供に背負わせた。板箕の中に入れて「しいなは飛んで　良い実はのこれ」といいながら、３回はぎる真似をしたり、一斗枡や箕の中に立たせたりもした」とあります。安曇野の他の地域でもほぼ同様の祝いをしていました。

初誕生におもちゃに囲まれて（豊科成相　昭和38年）

七五三から大人へ　三歳、五歳、七歳の11月15日には帯結びなどといって節目となる祝いをしました。それまで着ていた付け紐の着物から付け紐のない着物を着て帯を結ぶようになるなどして、子供の無事の成長を祝ったのです。現在でも三歳であれば保育園入園、かぞえで七歳には小学校入学などの節目の年齢でもあります。かつては小学生になれば、道祖神仲間といった子供組へ入りました。道祖神仲間では、祭りなどをおこなうことをとおして年齢の違う子供たちと係わり、社会性を学びます。子供たちは初めて家族以外の集団に属することで、大人への階段を一歩上がるのです。

そして女性は13歳、男性は15歳になれば心身ともに大人になり、日々の仕事が一人前にできるようになると、大人の第一段階として認められたのです。

コラム④　病気平癒の基礎知識

親にとって、子供が病気になることほど切なく、心が動揺することはありません。特に疱瘡や麻疹は、死亡率の高い病いとして恐れられておりました。「疱瘡は見目さだめ　麻疹は命さだめ」などといわれ、いずれも幼子にとっては、「子供の厄」ともいわれるほどに命の危険を伴う病いでした。麻疹などにかかると風にあてると重症化するといわれ、子供の寝床の周りに屏風を立てまわして重症化しないように工夫をしたり、親はつききりで看病したりするのが常でした。市内でも「疱瘡流し」などが盛んに行われ、小さな藁の輪っかに赤い紙を巻いたものに赤い紙のご弊をたてて、道の辻や道祖神前の木などの吊るして疱瘡流しとしました。病は子供の命を脅かす禍であり、疱瘡流しの赤い輪を大勢の人に踏んでもらうとよいなどと考えて、地域社会の大勢の人の力を借りて病を治すことも考えられました。予防接種をするようになっても、12日目ごろにかさぶたになるのを見計らって、同様の疱瘡流しを行っていました。そのほか、明科の柏尾のように村中の人が風の神を作って神社の裏手に送り、風にかからないように祈願する儀礼もみられます。各家では、さまざまな病に効くといわれる薬草などをその季節にとって乾燥させておき、その時に備えることも日常的なこととして行われておりました。

風の神祭り（明科潮沢柏尾　平成26年）

◆◆変わる儀礼◆◆

共同体から個人の儀礼へ　ここまで、昭和40年代までの安曇野でおこなわれてきた出産や育児にまつわる儀礼を見てきました。儀礼をとおして、家族だけでなく、同姓や地域住民などの共同体全体で、子供の無事な成長を祝っていることがわかります。

昭和30年代以降の日本では、特に都市部で核家族化が進み、子育てに祖父母や地域の住民などが係わることが少なくなりました。育児のほとんどが母親専任となる核家族では、母親が育児疲れや育児ストレスなどを抱え込みがちという問題や、外へ出て働こうにも子供を保育園で預かってもらえないという待機児童問題も大きくクローズアップされました。

安曇野では、18歳以下の子供がいる世帯のおよそ26％が三世代以上の同居（市統計による）です。都市部に比べ、子育てに祖父母の協力も得られていることも想像できます。しかし、ここに表したような儀礼は、ほとんど親と祖父母のものになり、地域住民が係ることはほとんどなくなっているのかもしれません。

儀礼の産業化　ごく近親だけで済ませる儀礼になっていく一方で、宮参りや節供、七五三などは、晴れ着やドレスなどを着ての写真スタジオなどでの撮影、寺社への参拝とホテルなどでの会食がセットになったものなど、家や地域でおこなうものから、サービス産業に依存しておこなうことも多くなりました。儀礼の本質的な意味が薄れていることもあるのでしょうが、少子化もあり、子供に係るさまざまなモノやコトが盛大に祝われるようになっています。

しかし、儀礼の意味が忘れられているとはいえ、いつの時代であっても、親たちが子供の健やかな成長を願うことは変わらないのではないでしょうか。

「ふるさと安曇野　きのう　きょう　あしたNo.14」
編集　安曇野市豊科郷土博物館
発行日　平成28年7月16日
安曇野市豊科郷土博物館
〒399-8205長野県安曇野市豊科4289番地8
TEL：0263-72-5672　/　FAX：0263-72-7772
URL：http://azuminohaku.jp/